

の会員である由本みどり氏の画期的な研究が記憶に新しい。これらの先行研究が、とくに草間彌生やオノ・ヨーコなど戦後に渡米して国際的な評価を受けた作家に焦点を当てていたのに対し、ドイツで学位論文として著された本書は、むしろ国内に留まって前衛運動に加わった女性について、日本の美術界や運動体に占めた彼女たちの位置の分析に重点を置いている。主に取り上げているのは、「実験工房」の福島秀子、「具体」の田中敦子、山崎つる子、「九州派」の田部光子、「ネオ・ダダ」の岸本清子（さやこ）の5人である。彼女たちは、戦後美術の革新の時期に、いかにして美術界で頭角を現していったのか、どのような障碍にぶつかったのか、作品はどのように受容されたのか。これらの問いに答えるために、著者は明治以来の美術界の諸制度（教育、展覧会組織、美術団体など）や、女性と女性美術家についてのステレオタイプなイメージを批判的に検証する。やはり本研究会会員である栃木県立美術館の小勝禮子氏が企画した「前衛の女性1950-1975」展が、まさにこのテーマの先行展覧会といえ、本書は小勝氏の研究を参照している。表題の「アヴァンギャルド？ 男のすることだ」は、戦前の1938年に前衛女性美術家の草分け、桂ゆきの作品に対して、作家仲間の男性が言い放った言葉である。

広汎な文献の渉猟と作家インタビューからあぶり出されてくるのは、たとえばこんなことだ。男性中心の前衛美術運動のなかでメンバーとして男たちと互角にやっている（ように見える）女性作家に対して、「例外的な存在」という称賛のレッテルが貼られるのだが、むろんここには差別の落とし穴がある。女性作家一般の不在が当然視されてしまうばかりか、「例外女性」をとりあげる批評家や美術雑誌は、彼女たちの個人的な人となりに興味をもち、肝心の作品についての考察は背景に退くことになるのだ。

作家としての強い自覚をもった彼女たちは、伝統的な「女流」や「女性芸術」に括られることを忌避するゆえに、作品制作と「女であること」は別問題

マーレン・ゴツィック

Maren Godzik

アヴァンギャルド？ 男のすることだ——  
1950～60年代日本の女性アーティストたち

München : IUDICIUM, 2006

評・香川檀

欧米における戦後日本の女性アーティスト研究としては、展覧会キュレーター、アレクサンドラ・モンローの先駆的な仕事をはじめ、近年では本研究会

だと主張する。そうした作家の意図を離れて作品じたいがもつ無意識の位相までジェンダー論を掘り下げる必要を示唆しつつ、著者は前衛美術が女性の表現者にもった意味を、邦語文献だけでなく英米やドイツのジェンダー研究をも拠り所にして探っていく。日本の読者にとっては、わが国の戦後美術における女性作家のテーマが、欧米のジェンダー美術史研究に照らして解説され、理論的な基礎づけを与えられる醍醐味が味わえる。まさに邦訳が待たれる好著である。

(表象文化論／武蔵大学教員)